

悩み持つ様々な人 地域ぐるみで支援

団体や自治会つなげ多面的に

若者の居場所づくりを手がけるNPO法人が、福祉施設や高齢者支援サークル、地元企業、自治会などつながり、サポートの輪を広げる。そんなプロジェクトが、さいたま市見沼区で進んでいる。ひとつの団体だけでは難しかった多面的な支援をしたり、相互に支え合ったりする地域づくりをめざしている。

さいたままでプロジェクト

プロジェクトの中心は、NPO法人のさいたまユースサポートネット。2011年の設立以来、家庭や学習面で困難を抱える子ども・若者ら向けの居場所づくりや学習支援を手がけてきた。だが、子どもを支えるには、親の就労サポートやメンタルケア、障害への配

慮など必要で、多面的な支援の大切さを感じてきたという。

そこで20年から、地域のさまざまな民間団体や福祉施設、企業、学識者、自治会などが連絡を取り合い、相互に乗り入れる形でサポートの輪を広げる「堀崎プロジェクト」を始めた。外

国人世帯の子どもや複合的な困難を抱えた子ども・若者らを可視化し、みんなで支えていく活動だ。

具体的には、子育ての悩みを共有する「親カフェ」や高齢者の体操教室の会場に、さいたまユースサポートネットの施設を使ってもらうことで、世代をまたいだ交流が始まるなどの効果が出ているという。

地域の社会福祉協議会や自治会、学識者らと年4〜5回、参加者の変化や今後の計画などを話し合う運営協議会も開いている。

同施設で月2回程度「親カフェ」を主宰しているさいたま市北区の久野恭子さん(55)は、発達障害の長女(25)の子育てに悩んできた。子ども向けの支援はあっても、保護者の悩みを受け止め支援する場が少ないことを課題だと感じており、このプロジェクトに自ら参加を申し出たという。

「それぞれの悩みを持ついろいろな人を地域で丸ごと支えるという理念に、とても期待している」と話す。

7月下旬には、同施設を開放し、縁日形式のイベント「ほりさきマルシェ」が開かれた。農家による野菜販売やハンドメイドのワークショップなどが軒を並べた。福祉作業所の障害者が作った輪投げ・迷路コーナーなどもあり、音楽サークルやキッズダンスのパフォーマンスも披露された。普

段から同施設を利用している子どものほか、地域で市民活動をしている団体ら近隣住民約400人が訪れた。

さいたまユースサポートネットの青砥恭代表は「既存の支援の枠組みからこぼれ落ちてしまう人を支えるには、いろいろな人が関わるのが大切だ」と言う。困難を感じていない子どもが帰りに遊びに来たり、住民がお茶を飲み立ち寄りたりするような活動をめざす。

「自然と支え合いが生まれる地域が目標。そのハブとしての機能を強めていきたい」と話す。

(小林未来)



近隣住民でにぎわった「ほりさきマルシェ」。子どもたちが遊んでいるボード型の迷路やパチンコは、福祉施設の障害者が作製した。さいたま市見沼区